同窓会報

発行所
岩ケ崎高等学校同窓会
宮城県栗原市栗駒
中野愛宕下1の3
TEL (0228) 45−2266
FAX (0228) 45−2267
印刷　タカハシ印刷

題字　菅原　久枝（S30卒）
写真　佐々木勝行（S38卒）

同窓生の輪を大きく広げましょう！

同窓会会長
葛岡　重利
（昭41年卒）

昨年の総会で芳賀会長の後を引き受けることになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私が入学したのは今から五十一年前の昭和三十八年です。団塊の世代と称され、学級数が一クラス増え五クラスになった年でもありました。鶯沢工業高校の前身である鶯沢分校を含めると三三〇名程だったと思います。今年の入学生は、一一一名で当時と比較し大きく減少しております。

半世紀を経過し、日本の人口構造も大きく変わり、少子高齢化が加速しております。

生徒数の減少とともに、平成二十一年には、鶯沢工業高校が生徒募集を停止し、岩ケ崎高校の鶯沢校舎として創造工学科が新設され早、五年が経過しました。

鶯沢工業高校の閉校に伴い二年前から鶯工同窓会と合併し、一つになって事業運営を行っており、本年も一〇九名の卒業生を同窓会員として迎えることができました。

同窓会の役割は、母校や生徒のためにどんな支援ができるかにあると思います。そのためには生徒を取り巻く環境の変化に敏感に対応できるよう母校との連携を密にし、同窓会に集う同窓生の輪を大きく広げることが大切だと思っています。協力金のご芳志をお願いできる環境づくりにも取り組んで参る所存です。

尚志育英の精神を繋いで

学校長
髙橋　義典

本校OB蘇武校長先生の後任として、この四月本校に着任しました髙橋でございます。同窓生の皆様には、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。また、日頃より本校の教育活動にご理解を賜り、ご支援、ご協力をいただいておりますことに深く感謝申し上げます。

さて、本校創立七十三年目の春、一一一名の新入生を迎え、全校生徒三五三名で新年度がスタートしました。生徒達は素朴で誠実な印象が強く、それぞれの目標を持って毎日の授業に熱心に取り組んでいます。また、部活動にもひたむきに取り組む姿が印象的です。今春の進路決定状況は八ページにまとめられていますが、普通科では国公立大八名をはじめ、多くの生徒が大学進学、公務員就職を果たすなど、目指す進路を実現しています。また、創造工学科では四年制大学への進学や民間企業への就職など、専門性を生かして進路を達成しています。尚志育英の建学の精神に基づき、先生方の懇切丁寧な指導を受けて、文武両道、自己実現に向けて日々努力する姿は本校創立以来、一貫して続いてきたものと思います。私としても一人一人の目標実現のために力を尽くしたいという思いを強くしているところです。今後とも皆様の温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、同窓生の皆様のご健勝と本校同窓会の益々のご発展をお祈り申し上げ、挨拶とさせていただきます。

支部だより

語り伝えるべきこと

東京支部長
佐々木くに子
（昭37年卒）

東日本大震災より三年が過ぎた四月二十八日、釜石市唐丹町本郷地区に津波記憶石を訪ねました。

東京岩高会報五十五号に編集者が記事に取り上げ、その事実に出逢いたく共に出掛けました。

製鉄都市釜石市内二つのトンネルを抜けると桜満開の唐丹町に到着しました。早速、唐丹地区生活応援センター所長見世健一様に建立場所まで御案内して頂き、津波の凄さ膨大な被災について説明して下さいました。

中心地である本郷地区の街並みがある高さまで全てのみこまれたこと、以前に建立された三メートル程の巨大な津波記憶石が十数メートルも流された津波の脅威を話され、所長さんの御自宅も無くされたことも伺いました。

テレビや新聞でも報道され東京岩高会報の記事となりました中学二年上野栞璃さんの言葉を見つけました。

百回逃げて　百回来なくても
百一回目も必ず逃げて
「伝えつなぐ大津波」と題字され、応募された言葉を全て刻み残されたと、五基の記憶石が「全優石」様より寄贈建立された旨感謝の意を込めて話されました。

つなみてんでんこ。
自分で自分の命をまもれ。
じしんが来たらすぐ高いところへ。

佐藤勇樹　小学四年

楽しい日々、大切なものが流れても、笑顔と友情はけっして流れない。

鈴木智己　中学三年

などと事実を伝え繋ぐ言葉の一つ一つに胸が締めつけられる思いでした。

私たちには語り伝えていく役目が御座居ます。五月五日こどもの日、福島県の被災地にて京都清水寺森清範貫主様が今年の漢字一文字を「絆」と書され表現されました。

東京岩高会は縦横の人の繋がりを皆さんと一緒に確かめ合っていきたいと思います。

今年の総会は十一月二十九日(土)、上野公園グリーンパークでお待ちしております。

仙台支部長回想

仙台支部長
高橋　清志
（昭44年卒）

私は、今年の四月から、東北唯一の小児高度専門医療施設であります「宮城県立こども病院」に勤務しております。

私にとりまして、宮城県立こども病院は、宮城県、宮城県住宅供給公社に続く三番目の職場となりますが、六十三歳となりました私の年齢からするときっと最後の職場になるだろうとも思っております。退職までの間、職責を果たすべく頑張る所存でおります。

さて、「こどもの日」の前日の五月四日、総務省は、十五歳未満の子どもの数は総人口の12・8％の一、六百三十三万人で四十年連続の下落と発表いたしました。

日本人の出生者数を調べましたところ、昭和二十二年から二十四年の第一次ベビーブームはそれぞれ二百七十万人、私が生まれた昭和二十六年は二百十三万人、それが平成二十三年には百五万人と大きく減少していることに驚かされました。

私が子どもの頃は、子ども達みんなで、日が暮れるまで学校の校庭や空き地でよく遊んだ覚えがありますが、少子化が要因でしょう、昨今は外で遊ぶ子どもの姿を見かけることがめっきり少なくなりました。

今の子ども達には、遊びに必要な、時間、空間、仲間の三つを確保することが難しくなったのだろうかと思います。

前述の総務省発表には、今後も低年齢ほど人口が少ないことから少子化の傾向は変わらないとみられるともありました。

日本の将来を考えますと、国や地方自治体のより一層の少子化対策が急務と考えます。

さて、仙台支部の今年度の総会でありますが、現在、開催日程を調整中であります。

決まり次第、皆さんに開催のご案内をさせていただきますので、多くの同窓生の皆さんがご出席されますようお願い申し上げます。

終わりに、故郷と岩ケ崎高校の益々の発展、同窓生の皆様方のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

思い出の先生方

思い出深い岩ケ崎高校

元岩高教諭
高橋　忠
（昭49～昭58）

協力隊員としてエチオピアに二年半滞在、岩ケ崎高校には年度途中で赴任しました。小生の教員生活の中で最もおもしろい充実した八年間の幕開けでした。

純朴な生徒が多く、授業に喰らいついてくるのでアフリカボケの脳をフル回転、今思えば学生時代よりはるかに勉強したような気がします。

「生物」を担当する者にとっては、岩ケ崎高校周辺の自然の豊かさは夢のようでした。授業では、よく校庭周辺はもちろん愛宕山、時には三迫川まで連れ出したものです。教室では眠そうな目をしている生徒も野外に連れ出したり、実験などになると目を輝かせる様が印象に残っています。

生物部は大所帯で、植物、魚、鳥、微生物などの班に分かれてコツコツと調査研究していました。自然科学の分野では生物部しかなかったので、天文班が同居していました。夏休みの合宿は、毎年六泊七日で海辺の公民館などを借りて実施するのが恒例になっていました。生物の班は昼間、天文班は夜間に活動するので何かと大変でしたが、何故か皆仲良く一つにまとまっているのは不思議でした。

数年前、小生が担任したクラスの卒業生達が退職祝いの会を開いてくれました。三十年以上も会う機会がなかった卒業生も多かったのですが、当時の面影が残っているもので、思い出話などで大いに盛り上がりました。五十を越えたおじさん、おばさん達になっていましたが、元気さは相変わらずで安心しました。教師冥利に尽きるひとときでもありました。

退職後は、晴耕雨読と趣味の野外散策や写真撮影などのんびり、しかし、生き生きと暮らしています。

最後になりましたが、岩ケ崎高校の益々のご発展と同窓生の皆様のご健勝とご多幸を心より祈念申し上げます。

炯眼の飯田校長

元岩高教諭
清水　治男
（昭23～昭25）

岩ケ崎高校開校の折、お世話になりました。勤めたのは三年間。七十年程前のことですが、校長先生のことが、昨日のように思い出されます。

昭和二十三年の創立、それ以前に故郷の先達の有志の企画のもと高校創立。

その中心が現在の四国、高知大学の教授を辞して、岩ケ崎に帰郷されたのが、三十八歳の若さの飯田先生。

現在の企業だと主任年齢。

終戦前の岩ケ崎は城下町として栄え、特筆すべきは、徴兵検査と馬市、細倉鉱山との係わり、郡下の町村別の青年の検査、同級会が、現在の成人のように行われた。それが一ヶ月も続いた。

又軍馬、農耕馬の生産地として、春秋所謂馬市が開催され、近在近郷の人出に溢れ、関連の旅館、仕出し屋、料亭など、殷賑を極めた。

それが終戦でばったりなくなった。残る産業は農業。

農地開放、米の増産、畳表、藁工品で多忙。

教育の民主化、大衆化が進められた。

所謂、六三三の教育改革。

戦前、鳥矢崎、津久毛、栗駒、文字などからは殆ど、上級の築館に進学される方はなかった。

教育制度の恩恵に預かり、地元の民意による、地元民のための地元高校が推進された。

それを推進なされのが飯田先生、創立以来二十年も校長を勤められた。

改めて炯眼に敬服するものです。

故郷はこれまで人材流出、異郷で名を成した人が多々おられますが、過疎化の今こそ公的機関に頼らず、校章の柏と笹の組合立、地元志向の原点に立ち帰り、飯田校長の遺志をついで、故郷に還り、地元振興を計る時代と思います。

岩ケ崎小学校の名は失くなりました。岩ケ崎の名のあるのは岩ケ崎高校のみです。

岩ケ崎高校の永遠の発展と故郷の振興を祈って止みません。

＊新旧役員の紹介＊

昨年の総会で役員の交代がありました。

長い間ご苦労様でした

旧役員

会長　芳賀　康雄（昭37高）
副会長　千葉　幸一（昭38高）
常任幹事　鎌田　明聰（昭28高）
常任幹事　阿部　一義（昭31定中）

よろしくお願いします

新役員

会長　葛岡　重利（昭41高）
副会長　後藤　家光（昭46高）
副会長　菅原　浩紀（昭54高）
常任幹事　濁沼　栄一（昭44高）
常任幹事　大江　洋樹（昭56高）
常任幹事　黒田　睦（昭58高）
常任幹事　四ノ宮健治（昭54高）

回想

元鶯工高教諭
尾崎　雅健
（昭46～平6）

開校三年目の昭和四十六年春、初任で鶯沢工業高校へ赴任した。施設はまだ建設途上であり、校舎屋上での新任式でした。その後、体育館、管理棟、機械科実習工場（鋳造、鍛造、仕上・組立、精密工作）が落成し、教育環境の整備も進み、名実ともに工業高校となった。意気軒昂な生徒が多く、共に楽しい学校の歴史と伝統の創造に励んだ。

昭和五十三年度からは、本校独自の「機械実習書」を使用した「機械実習」が行われた。また、「工業数理」でも自学自習用テキストが作成され、主体的な家庭学習の取り組みが図られた。

昭和五十八年に板金・溶接・NC旋盤実習室が竣工し、翌年NC旋盤、スーパーミニコンピュータシステムが導入された。これまで、宮城県教育研修センターで宿泊しながら行ってきたNC旋盤実習を、本校で実施するようになった。平成元年にCAD／CAMシステムが、平成五年には産業用ロボット・CNC旋盤システムが導入された。生徒は、知識・技術の高度化、複合化に対応した実習に、目を輝かせながら意欲的に取り組んでいた。

平成五年度から、地元企業のご協力により、産業現場実習を実施することとなった。校外で実践的な知識・技術の習得や進路意識の高揚、更に地域社会との教育連携が図られた。

平成七年三月末、最後の栗原電鉄と同時に転勤した。振り返って見れば二十四年間、教員人生の大半を過ごすことができた。私の思い出の殆どを占める学校である。

時折、今はない駒場の踏切で、思わず車を一時停止すると、朝の登校時の雑踏が甦る。あの校歌に歌われた椿は、今年も咲いていることだろう。

最後に、宮城県岩ケ崎高等学校並びに同窓会の益々のご発展をお祈り致します。

雑感

元鶯工高教諭
二階堂　康　允
（昭46～平16）

近頃は、爺も捨てるという姥捨て山への待機者の私に、何故か突然、原稿依頼があり、鄭重にお断りしたが、なんだかんだと言いくるめられ、ついに書くことになってしまった。ボケ老人の戯言と、読み流していただきたい。

この半世紀の間に、鶯沢工業高校は、名門の岩ケ崎高校から分離独立し、産業界が必要とする技術者の育成を行ってきた。独立当時は、地元の通称細倉鉱山が隆盛を極め、街には活気があふれ、中学校は生徒数が多くマンモス化するなどしていた。鶯工も幾多の有為な人材を輩出し、地元企業は勿論、県内外の企業の製造現場における技術の向上・維持に貢献し、高い評価と信頼を得てきた。しかし、栄枯盛衰は世の習いとは言え、細倉鉱山が海外産の鉱石に押され、事業の縮小を重ね、ついには閉山になってしまった。鶯工も細倉鉱山と運命を合わせるように、生徒数の減少が続き、前途を岩ケ崎高校に託しながら、閉校することになってしまった。鶯工の閉校は、単に地方の一高校が閉校したのとは訳が違う。栗原市を中心とした、県内外の産業の大部分を占める、中小企業の技術力を支えてきたのは、鶯工卒の技術者だからである。企業における技術者の育成は、一朝一夕で出来るものでない。因みに、電気主任技術者の国家資格等は、工業高校卒後三年間の実務経験を積んで、やっと資格が取得出来るもので、七年の歳月を要する。この資格が無ければ、皆さんが通学等で利用した栗電が運行出来ない、工場や商業施設、ホテル、病院等電気を使用する大型施設が稼働できなくなってしまう。また、工場では、設備の保守点検や技術更新のための技術者も必要である。地域住民の生活や産業を守るためにも、今後、技術者をどのように育てていくかを真剣に考えていかなければならないのではないだろうか。

駒場駅跡より鶯工を望む

近況報告

恩師の一言 匹夫を走らす

蘇武巖（昭41年 岩高卒）

岩高を卒業して四十八年、学舎と後背の栗駒山と常に苦楽を共にして来た。現在は神奈川湘南の地で栗駒山に似た丹沢山系「大山」に見守られながら、「きょういく」と「きょうよう」を実践している。

今日行く所と今日用事ある所を野外（屋外）と決めてゴルフの他、菜園で年間四十種類の野菜作りに汗を流す。また、江の島内「そば道場松本館」で指導員の一員として年間四百名に技を教えている。一方、料理・陶芸を習い、自作の器に盛り付けて一杯やるのを楽しんでいる。それと三年前クラス会に思いきって出席し元気を頂いたので、これからも参加したいと思っている。

さて、卒業後一寒村の匹夫は、関西の学舎で言葉通じず一年間無口の苦業、岩高で学んだ漢詩を頼りに詩吟を習い方言から脱出した。そして時は経済成長を支えるコンピュータ時代、大手アフターサービス専門会社に入社。機器のメンテナンスに始まり、人・物・金の最適保守体制構築等多岐に渡る分野に携わる。また重要要害発生時は昼夜問わず原因と対策追究の日常であった。全国主要銀行のATMと公官庁の端末や證券・製鐵所のセンター保守統制を経て九州全域・経営の一翼を担った後退役した。この間幾度もハードル高い壁に突き当たるも、折れる気持ちを救ってくれたのは岩高恩師の一言であった。それは［担任］君達岩高生には納豆のねばりの如く強い精神力を持ってる→目的達成まで強い信念を持ち続けられる。［物理］何か問題？三段論法で云うと？→現状分析力。［体育］敵と戦う時は逆風・逆光を避けて陣を張れ→市場調査。［数学］公式・定理は遠い昔に完成したもの。悩まず使いこなせ→温故知新。に通ずるものでした。何度も助けられ感謝しています。これからは育ジィとして孫達に役立つ一言が残る様、自然体でいこうと思っている。

楽しかったフォークダンス

運動会

被災地の教育 復興を目指して

菅原一矢（昭52年 岩高卒）

昭和五十八年から小学校に勤務し、学校や公民館など八つの職場に勤務いたしました。出張や研修の時、第一線で活躍する岩高の同窓生の方とお会いして刺激を受けました。

松島自然の家に勤務した当時、直属の上司として蘇武徳行所長（前岩高校長・昭四十七年卒）に大変お世話になりました。蘇武所長は、地域の方々との連携を円滑に推進されるなど、大いに松島自然の家の活力を醸成した方で、同じ高校の先輩と勤務できる喜びと勤めがいを強く感じました。津波で全壊した松島自然の家の移転・再建は当時からの地域の方との強い絆の成果です。

私は、平成二十五年四月から、石巻市立山下小学校に勤務しております。着任して感じたのは、東日本大震災の大きな被災地である石巻市の小中学校の教育を担っている多くの岩高の同窓の方々の活躍でした。

菅原貞嘉住吉小校長（昭四十七年卒）、渡部洋渡波中校長（昭五十年卒）、西村耕太郎中里小校長（昭五十年卒）、菅原克也鮎川小校長（昭五十二年卒）。さらに平成二十六年四月からは、佐々木千早東浜小校長（昭五十三年卒）、小野寺俊幸二俣小校長（五十三年卒）。石巻市内五十九小中学校の中で、私を含め七名の校長が日々被災地の児童・生徒を育てる仕事をしていることを誇りに思います。石巻市内の校長の出身高校では、地元石巻高校に次ぐのは我が岩ケ崎高校だと思います。

石巻市は復旧・復興が進みません。校舎が全壊し臨時の校舎で学習している学校、多くの子どもが仮設住宅から通っている学校、子どもたちへの心のケアなど、いくつもの課題に直面しております。

被災地石巻の教育を担う役割の拝命を重く受け止め、尚志育英の精神を胸に岩高同窓の方々と協力しながら日々精進していく決意です。

皆さんに感謝

佐竹　順子
（昭47年岩高卒）

昭和五十一年に金成町役場に保健師として就職して以来、保健活動に従事し今年の三月に退職しました。三十八年の間には町村合併、震災対応、家族の病気等色々な事がありましたが、その度に職場を始め周囲の方々に支えられて最後まで勤めることが出来、感謝しています。

岩手・宮城内陸地震の時は前日まで乳がん・子宮がん検診があり、伝創館に多勢の方が集まっていたので、この時起きてたら大惨事になっていたかもと思うとぞっとしました。いこいの村に勤務していた夫を送り出し、朝食の片付けを済ませて台所を出た時に地鳴りとともに地震が起きました。縦に大きく揺れ身動きができないまま、ガラス戸が落ちていくのを見ているしかありませんでした。壁が落ち、タンスも倒れて足の踏み場もない状況の中、呆然としている年老いた母と介護を要する祖母を置いて職場に出なければならない辛さをひしひしと感じました。幸い外傷もなく、山にいた夫の無事も確認できたので、避難所の対応、被災者の対応に専念できました。県の保健師、看護協会、医師会、自衛隊等たくさんの方に応援していただきました。

仮設住宅から全員家に戻り一段落したところで東日本大震災があり、高清水の庁舎が半壊状態になりました。再び非日常的な生活が始まり、ガソリンもなかなか手に入らず通勤にも苦労しました。長男が多賀城に勤務しており、津波の被害がありましたが何とか無事に帰ってきました。沿岸部でかなりの死亡者が出て胸が張り裂けそうでした。もう二度とこんな目には会いたくないと思いますがそうもいかないようで心配です。

平成二十三年七月に保健推進係が五箇所の保健推進室に集約され、最後の勤務地が栗駒でした。担当地区は二箇所に増えましたが保健師、栄養士の人数も増えたので、業務のやり繰りや話し合いが出来、働き易くなりました。

岩高を岩ケ崎館山公園より望む

平成二十五年四月にたった一人の妹が突然他界し、悲しみにくれました。母はそれ以上だったでしょう。勤務中、留守番をしてくれていた母も近頃物忘れがひどくなり、誰か側にいないと不安で何度も電話を掛けてくるようになりました。

しばらくは今まで頑張ってくれた母に寄り添って、あと何度一緒に見られるか分かりませんが、四季を楽しみながらゆったりと過ごしたいと思います。

共に考える

伊藤　紀明
（昭59年
鶯工高卒）

物心ついた小学校の時に自宅では父が電気工事を営んでおり、何のためらいも無く鶯沢工業高校に入学した。クラスは電気科という事もあり、入学から卒業まで同じメンバーであり、担任も三年間受け持って頂いた。時の担任である佐々木先生の言葉が今も鮮明に覚えている。「電気工事士試験に合格すれば社会で役に立つ人間になれる、後の勉強は必要ない、先ずは資格試験勉強をしよう・・・」これを実現すべく、担任の時間は一次試験である筆記試験合格を目標に勉強が進められ、多くの合格者が発表された。その後合格者は二次試験である実技に向けて夏休み返上で学校に通い、多くの先生の協力により晴れて電気工事士免状を手にする事が出来た。今では到底無理な担任の教育方針により、我々は社会で役立つ資格と頑張れば報われることを身をもって体験し、自ら目標を設定し突き進む事を学んだ。現在、多くの学生が将来の目標が決まらずとりあえず高校という考えを「悪しき風潮」と非難することもあるが、バブル崩壊後の日本の経済と生活を考えると夢を持って将来を考える人が少ないのも納得出来る。高校での勉強は何のためにするのか？「大学に進学するため」「公務員になるため」はたまた「お金持ちなるため」色々な意見があるが、どれが正解でどれが不正解であるかは誰も分からない。これからの時代は紛れもなく今の若者が築き上げなければならないのもこれまた事実である。学生の立場にするとウザイ話であるが、いちばん重要なのは学生本人がどう考えどう行動するかである。その点この度普通高校と工業高校の同窓会が合流した意味は大きい。多岐に渡る意見と違う環境で学生生活をしてきた会員が一堂に介する会の意義を認識し、我々大人も考え行動したいと思う。

母校、生徒のために

高橋　勝男
（昭51年　鶯工高卒）

私は、平成二十一年から栗原市の市議会議員として、現在二期目で、平成二十四年の同窓会統合後からは、同窓会副会長の任に就いております。

昭和五十一年三月に鶯沢工業高校、電気科を卒業し、栗原電鉄株式会社に入社し、電路設備や変電所、踏切保安施設、社内電話などの通信設備の保守点検を担当する施設課に配属になりました。

平成十九年三月の廃線までの三十一年間、施設課一本で仕事をしてきました。

栗鉄沿線には、岩ケ崎高校や鶯沢工業、若柳高校、栗原農業高校があり、朝の通学時間帯は多くの生徒で電車は満員だったことが思い出だされます。

鶯沢工業高校の第一期生は昭和四十五年三月卒業ですから、昭和五十一年三月卒業の私は第七期生になります。

若い先生や独身者が多く先生というよりは兄貴分的な感じで、卒業後も親しくして頂いています。

学校時代の思い出というか大変だったのは、毎週月曜日に午前中の四時間をかけて行われる実習、その内容をレポート提出、その後、先生からの質問、正解しなければ受け取ってもらえませんでした。

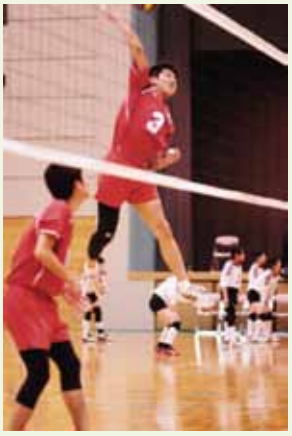
提出期限もあり、レポートの数は週ごとに増えていきます。教室での情報交換やレポート内容のチェックや質問に対する回答などを打ち合わせして行くと、質問内容が変わっていたり、先生方とのやり取りが面白かった事が思い出されます。

一方、課題であった岩高入学生の増加に向けて学校、同窓会が一丸となって要望してきた片道百円バスが平成二十五年十月一日に実現しましたが、くりでんがあった時のような石越や若柳、金成方面からの新入生は激減しています。岩高までの通学体制の確保が課題です。これからも母校の生徒のためにも頑張ります。

昭和50年度
電気科の実習風景

優勝おめでとうございます

男子バレーボール・ソフトボール



地区総体優勝

同窓会のご案内

平成二十六年度同窓会総会が次の日程で開催されます。

日　時
平成二十六年
八月二日（土）
午後三時より

会　場
ベルディ栗駒

当番幹事
昭和50・60年
平成7・17年卒

代　表
豊嶋　潤・後藤孝行

◎問い合わせは
岩ケ崎高校同窓会事務局へ
電　話
0228-45-2266

懇親会費　二千円
※参加については、当番学年で参加券を扱っております。
尚、当日の参加も歓迎いたします。

進路状況

進路指導部長
高橋昌枝

本校は、平成二十四年度までの五年間を進学拠点校学力向上事業の指定校として、さらに昨年度からは進学重点校学力向上事業の指定校として、教職員一丸となって学力向上と進路達成を目指して取り組んできました。本校の職員室前の廊下には自学自習用の長机があり、早朝より学習する生徒、昼休みに質問に来る生徒の姿が一年を通してみられます。今年度からは図書館の隣の教室を新たに自習室として活用しています。

過去五年間の進路状況は別表の通りになりますが、国公立大学合格者数が減少傾向にあり、国公立志願者への指導が重点課題の一つと言えます。私立大学に関しては、最後まで粘り第一志望に合格した生徒もおります。就職に関しては、創造工学科の卒業生が東北電力内定という快挙を成し遂げました。

今年度も引き続き、進路情報の収集・共有・提供・発信を行い、生徒の進路達成に対応できるよう努めていきたいと思います。

過去5年間の進路状況（平成26年3月31日現在）

※進学者数		平21	平22	平23	平24	平25
国公立大学	北海道教育函館					1
	弘前大					1
	秋田大			1		1
	岩手大		2	3	3	1
	東北大	1				
	宮城教育大			2		1
	山形大	4	3	1	1	
	福島大	4		1		
	茨城大				1	
	千葉大					1
	宮城大	3			2	1
	岩手県立大	1	1	1	1	1
	青森県立保健大	1				
	秋田県立大	1	1			
	会津大			1		
	高崎経済大				1	
	山梨県立大	1				
	都留文科大	1				
	計	17	7	10	9	8

※私立大は延べ合格者数		平21	平22	平23	平24	平25
私立大学	東北学院大	27	15	22	17	20
	宮城学院女子大	7	3	1	6	9
	東北福祉大	8	2	5		11
	東北工業大	6	3		6	1
	東北薬科大	1	2			
	東北生活文化大			1	1	1
	東北文化学園大	4	5	2	5	1
	仙台白百合女子大			2	1	
	尚絅学院大	8	3	5	8	3
	仙台大			5	1	
	石巻専修大	9	5	1	1	1
	東北文教大				4	1
	岩手医科大					2
	盛岡大		4	5	2	2
	白鴎大	4	3	4	2	1
	東北芸術工科大					2
	早稲田大	2				
	法政大	1				3
	青山学院大	1		1		
	中央大	3				
	明治大	1				
	神奈川大	2	2			
	国士舘大					1
	日本大	8	1		1	
	駒澤大	2	2	2		2
	東海大	1	3	3		
	東洋大	4				
	その他	42	34	27	25	27
	計	141	87	86	80	86

		平21	平22	平23	平24	平25
国公立短大等	東北職業能力開発大学校	5	4	1		3
	栃木県立衛生福祉大学校				1	
	山形県立米沢女子短	1	2			
	会津大学短期大学部		3			
	計	6	9	1	1	2

私立短大	聖和学園短期				2	
	その他	3		5		2
	計	3	0	5	2	2

高看・医療系	国立仙台医療センター附属	1	1		1	
	国立栃木病院付属		1			
	国立西埼玉中央病院附属		1			
	東京都立府中病院				1	1
	JR東京総合病院高等看護				1	
	東北労災看護				1	
	石巻赤十字看護		1		1	
	気仙沼市立病院附属	3	3	1	3	2
	花巻高等看護	2		1		
	水沢学苑看護	1	1	2	1	3
	仙台徳洲看護		1		2	1
	水戸医療センター附属	1		1	1	1
	土浦協同病院附属	1				1
	一関高等看護学院	1	1		1	
	聖マリアンナ医科大学附属看護				1	
	その他	3	1			2
	計	13	11	5	14	11

		平21	平22	平23	平24	平25
専各	専門・各種学校（高看除）	19	20	26	18	24

延べ合格者数

		平21	平22	平23	平24	平25
公務員	国家Ⅲ種（税務）				1	
	宮城県職員		1	3	2	
	宮城県警				1	1
	栗原市職員（事務・消防）		1	6	3	3
	登米市職員（消防）				1	
	東京消防庁消防官Ⅲ種					1
	海上保安学校・情報				4	
	その他（自衛隊含）			1	1	2
	計	0	2	10	13	7

延べ合格者数

		平21	平22	平23	平24	平25
民間	民間企業	0	6	7	10	13

（平23・24・25の就職は鶯沢校舎）

◀愛宕塾で学ぶ塾生

▶愛宕塾開塾式

岩高への思い

普通科三年
加藤　凪紗
生徒会長

岩ケ崎高校の最上級生として生活していると、入学してからの二年間が本当にあっという間だったな、と改めて感じられます。高校生活もあと少しだと思うと、悲しいような寂しいような、不思議な気持ちになります。

この原稿を書くにあたって「岩ケ崎高校とはどんな学校か」を自分なりに考えてみました。私は、岩ケ崎高校には落ち着いた雰囲気や先生、先輩方との距離が近いなどといった暖かさがあると思っています。私が入学時からずっと抱いている岩高へのイメージです。これが、他の学校にも負けない岩高の特徴だと思っています。こんなにも恵まれた環境の中で生活できたことを誇りに思います。

現在生徒会では、アルカス運動への参加や球技大会の二日間開催など、新しい活動にも積極的に取り組むことに挑戦しています。初めてとなる活動もあり、戸惑うことも多いと思いますが、失敗を恐れず、一つ一つ臨機応変に取り組んでいきたいと思います。

三年生はこれから、進路達成に向けてのラストスパートになります。時間は限られていますが、自分にできることから丁寧にしていきたいです。そして、しっかりと後輩たちに伝統を引き継げるように頑張っていきます。

高校生活について

創造工学科三年
四ノ宮大輔
生徒会長

私がこの学校に入学して、二年という月日が経ちました。高校生活というのは本当にあっという間なのだということを改めて実感しています。

この二年間を振り返ると、充実した高校生活を送ることができたと思います。私のクラスは同じことで何度も叱られてしまったり、話し合いの内容がまとまらずまとめ役をしていただいたりと担任の先生には毎日のようにご迷惑をかけてしまっています。しかし、そこからさまざまなことを学び、それを日常生活の中で少しずつ生かすことができています。このクラスはまだまだ未熟なところがありますが、入学当初に比べると着実に成長し進路に向けて頑張っています。

二年生の後期になって私は生徒会長という役になりました。前期では副会長として会長や先輩方をサポートしてきましたが、自分が会長になり生徒会を引っ張っていく番になり、前の会長のような活躍ができるか不安でした。会長になったことで人前で話す機会が多くなりました。何度か失敗をしてしまい、恥ずかしい思いをしましたが何事も経験だということを学びました。

高校生として過ごせる時間は残りわずかですが行事や普段の生活を大切にし、一つでも良い思い出を作れるように過ごしたいと思います。

スウェーデン交流
ホームステイを受け入れて

普通科二年
石川　貴大

私の家では、栗原市とサンドビックという会社からホームステイの依頼を受け、二週間ホームステイを受け入れました。

私の家には私より二つ年上の留学生が来ました。私たち家族は英語を話すことがあまりできなかったので、紙に簡単な質問を書いたものや、ジェスチャーとカタコトな英語でコミュニケーションをとりました。留学生の彼も私達家族に合わせ簡単な英語で話してくれたので徐々に慣れていきました。

私は、ホームステイ受け入れと学校のテストが重なってしまい、彼と遠くに観光することができなかったのですが、父と母が日本の良き文化を伝えたいということで、日本三景の一つである松島や世界文化遺産の平泉などに連れて行きました。彼も日本の文化は美しいと言っていました。

今回、ホームステイを受け入れてみて、他国の文化や生活習慣を学ぶことができ、英会話を体験する良い機会になりました。この経験は今後にしっかりと生かしていきたいと思います。

最後にこのホームステイ受け入れを支援して下さった多くの方々に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

ご理解とご協力に感謝

同窓会副会長
佐藤てる子
（昭43年卒）

同窓会は鶯高と一緒に活動して二年になり和やかに溶け込み活発に活動しております。

会員の皆様には益々ご清栄のことと拝察致します。又同窓会活動にご理解とご支援を頂き心より御礼申し上げます。

昨年同窓会は学校と連携して通学支援等を行政へ要望し百円（ワンコイン）でバス通学ができ経費の面で喜ばれています。市内の岩高志願者が増えることと期待します。

会報の表紙、雪化粧の栗駒山と岩高の素敵な風景です。栗原市の指定廃棄物最終処分場の候補地に断固反対、安全な郷土を守るため皆様で頑張りましょう。

母校の更なる発展を願い、一層のご支援をお願い申し上げます。編集委員一同親しみのある会報作りに頑張ります。

平成25年度 宮城県岩ケ崎高等学校同窓会会計決算書

平成26年3月31日現在

○　収入合計　1,816,168 円
○　支出合計　1,489,281 円
　　差引残高　326,887 円（次年度へ繰越）

1. 収入の部

項目	決算額	摘要
1 入会金	392,400	25年度　109名
2 協力金	950,000	453名
3 前年度繰越金	443,521	
4 雑収入	30,247	同窓会より繰入(30,195円) 利子（52円）
合計	1,816,168	

2. 支出の部

項目	決算額	摘要
1 卒業記念品	68,670	証書フォルダー
2 支部助成費	200,000	東京・仙台支部へ
3 旅費	412,584	各支部総会参加等
4 本部総会費	88,036	総会補助
5 会報印刷費	143,325	3,500部
6 入会式費	2,940	
7 事務費	409,410	
本部事務費	49,929	役員案内用はがき等
振込手数料	49,240	協力金振込手数料
会報送付委託料	310,241	㈱サラトへ支払い(2,091件)
8 役員会費	10,756	茶菓子、昼食費
9 慶弔費	6,160	レタックス代(2件)　お悔やみ(1件)
10 積立金	100,000	
11 産業教育振興会会費	5,000	
12 予備費	42,400	支部総会　送別会　ご祝儀
合計	1,489,281	

卒業年度別協力金の協力者内訳（一人2,000円）

S18	1人	S43	17人	H05	1人
S19	1人	S44	8人	H06	2人
S20	3人	S45	17人	H07	1人
S21	1人	S46	6人	H08	1人
S22	4人	S47	9人	H09	0人
S23	1人	S48	8人	H10	0人
S24	1人	S49	11人	H11	1人
S25	1人	S50	6人	H12	1人
S26	10人	S51	3人	H13	1人
S27	8人	S52	5人	H14	1人
S28	13人	S53	4人	H15	2人
S29	23人	S54	5人	H16	1人
S30	22人	S55	5人	H17	1人
S31	15人	S56	3人	H18	2人
S32	15人	S57	0人	H19	1人
S33	10人	S58	0人	H20	1人
S34	14人	S59	2人	H21	2人
S35	19人	S60	0人	H22	2人
S36	11人	S61	0人	H23	1人
S37	30人	S62	0人	H24	2人
S38	17人	S63	0人	H25	7人
S39	7人	H01	1人		
S40	16人	H02	0人	現職員	0人
S41	15人	H03	0人	旧職員	35人
S42	12人	H04	0人	鶯工	7人
				合計	453人

（2,000円以上協力戴いた方もおります）

平成25年度末積立金の残高は2,398,937円となっております。

訃報

謹んでお悔やみ申し上げます

今野　孝　様（昭43卒）
山内　常男　様（昭32卒）
高橋　格　様（昭34卒）
初代（昭40～昭47）同窓会会長
小野寺武夫　様（昭26卒）
佐々木正博　校長先生
（平4～平7）

（平成25年4月より平成26年3月まで学校に届けのあった方々）

編集後記

岩高・鶯高同窓会合併後二度目の会報発行となりました。

葛岡新会長のもと合併間もない編集委員会と思えない程和気藹々活発な進行に委員会の内にあっても驚きと感心が交錯しております。前回と同様今回も十ページでの発行となり、寄稿依頼は突然の電話にもかかわらず瞬時に快諾いただいた皆さんに厚く御礼申し上げます。

今後も、両校同窓生の情報を幅広くお届けしたいと思いますので、話題提供をよろしく御願い申し上げ編集後記といたします。（佐々木）